

◇ 邪馬台国はどこか

- ④ また海を渡り、千余里にして末盧国に至る。
- ⑤ 東南に陸行すること五百里、伊都国に至る。
- ⑥ 東南して奴国に至るまで百里。
- ⑧ 南して投馬国に至る、水行二十日。
- ⑨ 南して邪馬台(臺、台)国に至る、女王の都する所にして、水行十日、陸行一月。
- ⑩ 次に奴国ありて、これ女王の境界の尽くる所なり。其の南に狗奴国ありて、男子を王と為す。女王に属さず。
- ⑪ 其の八年、太守王頌、官に到る。倭の女王卑弥呼、狗奴国の男王卑弥弓呼と素より和せず。倭の載斯・烏越などを遣わして郡に詣らしめ、相攻撃するの状を説く。塞曹掾史張政等を遣わし、よつて詔書・黄幢を難升米に拝受せしめ、檄をつくりてこれを告諭す。

☆ 第二次大戦後、新政権の興った中国では、「史記」から「明史」に至る二十四史の整理・出版事業が始まった。この事業は中華書局と大学の連携の下、一字一句まで吟味されて四半世紀後に完成した。従つて、「倭人伝」の語句は、余ほどの理由がない限り一句一字たりとも違えるべきでない。



地図上でこれらを追って行くと、末盧国は唐津、伊都国は佐賀平野、奴国は筑後川南の山門郡・大和町辺りに至る。伊都国のあつた佐賀平野には、後世の国府が置かれた大和町、徐福を祀る金立神社、吉野ケ里遺跡がある。

⑧、⑨については、狗邪韓国を起点にとれば、本書の筋書き通り、投馬国は宮崎県西都市妻、邪馬台国は奈良盆地に到達する。

ここにある対馬、伊都国、邪馬台・倭、大倭、投馬については、同じ漢字、同じ読みの地名・国名が記紀や現地名にもあつて、対馬、伊都・巖、倭・日本・大和・山門、大倭・大日本、妻・都万と呼ばれてきた。双方を対比してみよう。

対馬国↓長崎県対馬 つしま 伊都国↓記紀の伊都之尾羽張神・伊都之尾羽張劍・巖姫 いづ

邪馬台国・倭↓記紀の倭・日本、奈良県の大和・福岡県の山門 やまと

大倭↓記紀の大倭・大日本、奈良県大和神社 投馬↓西都市妻、西都市都万神社 つま

本書はこれを踏まえた上で、この時代の歴史についてこう考えてきた。

一八〇年代中頃、畿内オロチ勢は、北九州の倭奴国(高天、日高と天之国)王朝を取り仕切る日隈(熊野家)の伊奘諾勢を出雲で撃破し、大倭に邪馬台国(初期の巖之国王朝)を打ち立てた。

大敗した倭奴国王朝、伊奘諾、倭奴国宗女の向津姫らは、南の熊襲に落ちて行った。

四十年後の二二〇年代前半、高千穂宮(天宮の高天原)で天神に立っていた日神の天照大御神(向津姫)は、天孫火瓊瓊杵を熊襲の吾田に降臨させると、大倭に遷座して倭(邪馬台)の女王ヒミコに担がれた。この熊襲については、記紀にこうある。

『伊邪那伎記』「筑紫島も、身一つにして面四つあり。面毎に名あり。故、筑紫国、豊国、

肥国、熊曾（熊襲）国・・・」

「景行紀」、「十二年の秋七月に、熊襲反きて 朝貢 ならず。十一月に、日向国に到りて行宮を起てて居します。是高屋宮と謂す。十二月、熊襲を討たむことを議る。」

「仲哀紀」、「紀伊国に至りまして、徳勒津宮（和歌山市）に居します。この時にあたりて、熊襲、叛きて朝貢らず。天皇、是に熊襲国を討たむとす。則ち徳勒津より発ちて、灘県に到りまして、因りて檀日宮（福岡市）に居します。」

★以上から、投馬国は、妻の国Ⅱ女系の家Ⅱ木花開耶姫が天孫火瓊瓊杵を婿養子に迎えた国、狗奴国男王卑弥弓呼は、ヒミコの子孫、即ち木花開耶姫に婿入りした火瓊瓊杵、と見なせる。

★「更に男王立つるに、国中服せず、更ごも相誅殺し、時にあたりて千余人を殺す」の記事も、ヒミコが火瓊瓊杵の児・海幸彦（火明饒速日）を呼び寄せ、日本朝を開かせた。その結果は、素戔鳴率いる旧勢力と抗争に陥り、千余人の死者が出たことを言う。

以上であるなら、「倭人伝」に一字一句違わないし、記紀の記述とも押しなべて合致する。

要するに、邪馬台国は三輪山西麓の纏向に都して、天照大神率いる厳之国王朝からヒミコを女王と仰ぐ天（厳）之国王朝に、さらに火明饒速日が天神に立つ日本王朝へ移り変わったのである。その国域は琵琶湖以南の南近畿一帯、つまり滋賀県や京都府の南側、大阪・奈良・和歌山・三重、兵庫南東部に及び、七万戸（約四〇万人）もの人口を擁していた。

